

関 弥生さんの思い出

千葉 明

若い頃から科学者の書いた随筆を読むのが好きで、中でも寺田寅彦、中谷宇吉郎の二人については文人科学者として敬愛の念を抱いていたが、次第にその思いが嵩じてこの二人と岩手との関わりを見つけ出すことに喜びを感じるようになった。そしてこの事が思わぬ縁となって私は関弥生さんに大変なお世話をいただくことになった。

(一) 関弥生さんからの初めての手紙

それは平成14年のことであった。私は「榭」に「寺田寅彦と岩手県とのつながりですが、残念ながら寅彦が岩手に来て何かをしているといった実績を見つけることは出来ません」と書いて投稿した。すると、これを読まれた弥生さんから、「突然手紙を差し上げますが、私は寅彦の娘の関弥生と申します」という書出しの手紙をいただいた。私は本当にびっくりしたが、そこには寅彦が東大の大学院生の時に岩手県の釜石付近の港湾の潮汐調査に出かけ、その時に近くの漁村にも足を延ばしていることを随筆「夏」の中の「験潮旅行」に書いてあること、さらにその時に調査した結果が「海水の潮汐的副振動」として発表されこの報告は世界の海洋学者から高い評価を受けたそうですと書かれてあった。

私はこの手紙がご縁となって、その後も幾度となく手紙をいただき、また電話でお話をする機会にも恵まれ、さらに「ゲッティンゲンの余光」の著者である高辻玲子さんのような弥生さんと特に親しくされている方を紹介していただくというような幸運にも恵まれることになった。

(二) 関四郎・弥生ご夫妻のこと

ところで弥生さんの手紙にはさらに驚くことが書かれていた。それは、「私の主人は国鉄勤務で、盛岡に鉄道管理局が作られた時に初代の局長として盛岡に赴任し、私も仙台から盛岡に移り、昭和25年の秋から28年まであしかけ4年盛岡で過しました。」とあったのである。その当時学生で盛岡に住んでいた私は、新聞やラジオで、岩手県スキー協会の会長として活躍している関局長の名前は見聞きしていたが、局長夫人が寅彦のご息女でしかも盛岡に住んで居られようとは考えもつかないことであった。私はこのことを機に、関氏について詳しく知りたいと思い、関係資料を探し、また弥生さんからも直接教えていただくと考えた。この結果を簡単に述べると、関氏は北大の工学部で電気工学を専攻し、昭和7年に卒業して国鉄に入社した。国鉄では鉄道の雪害対策や鉄道電化の問題に取り組んで大きな成果を挙げ、「国鉄電化の鬼」と本に書かれたこともある。そして「商用周波単相交流電化に関する研究」で学位を取得し、後年日本電気学会会長も務めた。

実は関氏は工学部の学生の時、理学部の研究室で中谷助教授と接する機会に恵まれ、国鉄入社後も中谷教授と接する機会が多かったことも明らかになった。つまり寺田寅彦—中

谷宇吉郎－関四郎・弥生の四人は一連の強いつながりで結ばれている人々であった。

また関氏の偉才ぶりをうかがわせる話として、氏は芝山倉平のペンネームで推理小説を書き高い評価を受けると共に「幻の探偵作家」として話題になったことなどもある文筆をよくする人でもあったことがわかった。

このようなことを知った私は、当時所属している同人誌「早池峯」に「岩手にゆかりのある文人科学者」と題して寄稿中であつたので、これに関夫妻のことも取り上げることにし、弥生さんにも新たに「盛岡の思い出」という文を書いていただき、私に下さった最初の手紙と共に寄稿することにした。「盛岡の思い出」の中には私達の知らない興味深いことが色々書かれていたが、昭和28年8月に関氏の企画で盛岡で開かれた講演会の日のことが次のように書かれている。「当時主人は父の親しくしていた安倍能成、小宮豊隆、中谷宇吉郎さんたちに公会堂で講演をお願いしました。小宮さんは長男の書之助さんがその当時東北農業試験場にいらっしゃったのでそちらに泊まれ、安倍さんと中谷さんはうちに泊まりました。そして夜おそくまで中谷さんは絵をかかれ、安倍さんは揮毫して下さいました。その時に描かれた絵は表装して、最近高知の文学館に父のものと一緒に寄付しました。その中には有名な「雪は天から送られた手紙である」というものもあります。」と。

(三) 弥生さんから贈られた本

平成14年秋のこと、弥生さんから私に電話があり「貴方は中谷宇吉郎さんを敬愛しているとのことですね。実は私の手元に中谷先生から主人に贈られた本がありますが、この本を大切にしていただけると思う貴方に差し上げたいと思います」との突然のお話で、それから十冊を超える本を送っていただいた。私は寅彦、宇吉郎に関する本となれば目に付く限り全てを購入していたし、ましてこの二人と深いきずなのある関氏に贈られた本のことであるので、驚きと共に本当に嬉しく頂戴した。頂いたそれらの本には毛筆で黒々と献辞と署名が書かれている本が多く、私には貴重な本となった。

ところでこうして頂くことになった本の中に「春艸雑記」が含まれていた。この本は私にとっては宇吉郎の随筆を読むようになった最初の本であるし、その中には私の中学時代の国語教師だった高橋巖先生の奥様のことに触れた「I 駅の一夜」が載っている思い出の深い本でもある。ところがこの新しく弥生さんから頂いた本は、私が所持していた本と同じく初版本でありながら、カバーも表紙の絵も全く別のもので、しかも定価も書いていない。実はこの本こそ中谷宇吉郎雪の科学館の「六花」で山田功さん等が論じていた特別な人の為にだけ製本された本であって、カバーは戦時中に日本軍が風船爆弾の気球用として使われた紙であり、非常に珍しい得難い本なのであった。

今顧みるに関弥生さんからはこの他にも数々のお世話をいただきながら、ご生前一度もお目にかかる機会が無かったことは誠に残念なことであった。